View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

立教観光学研究紀要　第 21 号　2019 年 3 月
St. Paul's Annals of Tourism Research No.21 March'19
pp.23–34.

博士論文概要

中国雲南省元陽におけるバックパッカー向け宿泊施設の変化

板垣　武尊

途上国の周縁地域ではバックパッカーによって観光資源が発見されてきたが，現在ではマスツーリストが流入し，さらにバックパッカーもフラッシュパッカー化してきている．本研究では中国雲南省元陽におけるバックパッカー向け宿泊施設の変容メカニズムを，立地変化，経営者の経歴，棚田景観を中心とした内観の演出，口コミ分析を通じた宿泊施設利用者の評価から分析することで解明した．一方で，元陽におけるバックパッカー向け宿泊施設は，マスツーリスト向け宿泊施設と棲み分けながら独自の発展を遂げてきた．そのため，マスツーリスト向け宿泊施設を比較対象として同時に分析することで，バックパッカー向け宿泊施設の独自性を浮かび上がらせた．また，実際に旅行者への聞き取り調査を行うことで，バックパッカーのフラッシュパッカー化や宿泊施設の変化に伴う観光行動の変化についても明らかにした．

元陽におけるバックパッカー向け宿泊施設は，バックパッカーのフラッシュパッカー化，宿泊施設経営者の能力や経歴，元陽の地理的環境など多数の要因に基づいて変化してきた．そして，バックパッカーの観光行動の変化と宿泊施設の立地変化が，バックパッカーのフラッシュパッカー化と需要を取り込む経営者の新たな運営方策の導入を元に，同時に進行した．加えて，バックパッカーとマスツーリストが観光の季節性と経営者の民族性において棲み分けられることによって，地元の少数民族が棚田農業を継続しながらも宿泊施設経営に参入できる一つの要因となっている．

このように，バックパッカーのフラッシュパッカー化およびバックパッカー向け宿泊施設の変化は，元陽のようなマスツーリストが優勢になった観光地においても起きている．したがって，途上国周縁地域における観光地を研究する際には，観光地の発展段階にかかわらずバックパッカーは無視できない存在である．加えて，バックパッカーの変化やフラッシュパッカーの実態についても分析する必要がある．

キーワード：バックパッカー，フラッシュパッカー，宿泊施設，棚田，元陽

1．はじめに

(1) 研究の背景と目的

途上国の周縁地域ではバックパッカー（以下 BP）によって観光資源が発見されてきたが，現在ではマスツーリスト（以下 MT）も流入し，BP もフラッシュパッカー（以下 FP）化してきている．ところが，途上国周縁地域では観光地化の担い手たる宿泊施設経営者の出身民族に基づく伝統的生業や外部世界との繋がりの分析が不可欠であるにもかかわらず，BP の FP 化という現代的な課題については BP 向け宿泊施設の質的変化のみが報告されている．

中国雲南省元陽でも近年急速に進みつつある BP の FP 化には，外部出身者である漢民族が運営手法の革新を伴った宿泊施設を開設して対応している．そこで本研究は，中国雲南省元陽において，BP 向け宿泊経営者の民族や経歴を考察したうえで，新たな運営手法の導入を分析し，さらに宿泊者の宿泊施設選択基準の変化を踏まえて，BP の FP 化に伴う宿泊施設の変化を解明することを目的とする．なお，2013 年の世界遺産登録に伴う MT

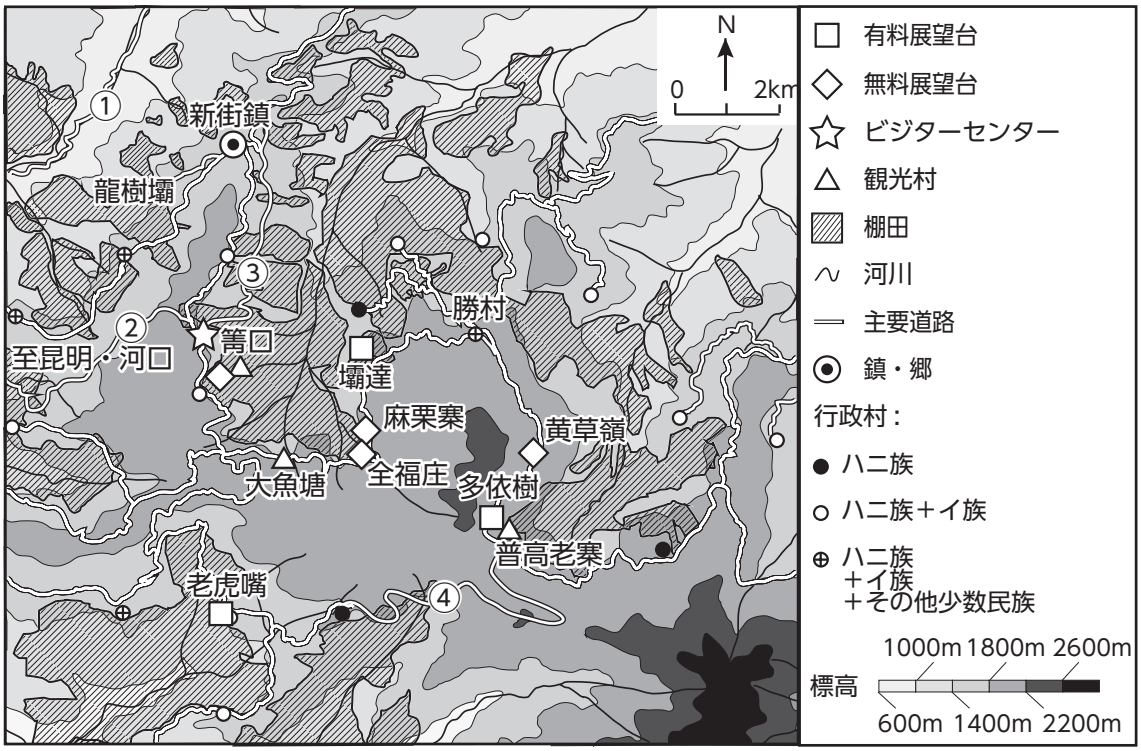

図１　元陽県中央部の観光施設および道路の分布（2015 年）

注：1. 地形・河川は旧ソ連製 10 万分の 1 地形図「ЮАНЬЯН」（1978 年発行）により作成．棚田・行政村の分布は Google Earth 衛星画像判読により作成．観光施設の配置は歩測により作成．主要道路は Google Earth 衛星画像および百度地図判読により作成．

2. 図中の①-④までの数字は 2011 年から 2015 年にかけて開通した道路を指す．

の急増には，政府による棚田保護政策によって耕作が義務づけられた少数民族が自宅を改造し対応している．この MT 向け宿泊施設を比較対象として同時に分析することで，BP・FP 向け宿泊施設の独自性を浮かび上がらせていく．

(2) 研究方法

以上の目的を達成するために，現地調査を行った．現地調査は，2009 年 8 月，2011 年 2-3 月と 8-9 月，2014 年 5-7 月，2015 年 12月-2016 年 1 月に行った．宿泊施設および観光施設（観光村・有料展望台）の分布，棚田および村落の分布，土地利用（新街鎮・多依樹）を把握するために，歩測および Google Earth 衛星画像，旧ソ連製 10 万分の 1 地形図「ЮАНЬЯН」（1978 年発行），百度地図の判読を行った．

元陽における宿泊施設および旅行会社からの経営や利用者に関する聞き取り調査は，2009 年 8 月に数軒の宿泊施設と旅行会社から予備的に行い，2011 年 2-3 月 と 8-9 月，2014 年 5-7 月，2015 年 12月-2016 年 1 月にかけて，本格的な聞き取り調査を実施した．

元陽の観光者については，以下の調査を行った．BP の出身地および訪問時期については，元陽にある BP 向け旅行会社の顧客情報を分析し，詳細な調査は，2011 年 8 月，2015 年 12 月に実施した BP および BP 向けのガイドからの聞き取り調査や滞在中の参与観察によって補足した．MT に関する情報は，宿泊施設および郷鎮企業からの聞き取り調査と筆者の参与観察に依拠している．

(3) 研究の手順

研究の手順は以下の通りである．Ⅱ章においては，アジアにおける BP の展開と彼らによる元陽の発見および MT の増加のプロセスを通して，前述した途上国周縁地域の観光地化の中に元陽を

位置づけた.

Ⅲ章においては，元陽における観光者の属性の変化を，BP と MT に分けて分析した．特に，宿泊施設の立地変動に対して大きな影響を与える BP に絞って，旅行スタイル，宿泊施設の予約，元陽での棚田観光などの観光行動を分析した.

Ⅳ章は以下の通りである．まずⅣ-1 で宿泊施設の立地変動と経営者の民族属性についてとりあげる．元陽には, 宿泊施設の集積する地区として，新街鎮，勝村，多依樹の 3 つがある（図 1）．そのうち，最初に BP 向け宿泊施設が集積し，バックパッカー・エンクレーブに成長しつつあった新街鎮と，外部出身者の漢民族によって FP 化に対応した新たな宿泊施設の集積が見られる多依樹を中心に，宿泊施設の立地変動と経営者の出身民族や出生地，職歴について分析した.

次に，Ⅳ-2 で宿泊施設の運営手法について，宿泊施設の設備・サービス，営業時期，経営者による棚田保有，宿泊施設の営業時期と棚田耕作との関連などを分析した.

最後にⅣ-3 で FP 化に対応した宿泊施設の運営手法の革新に関して，宿泊客による宿泊施設ごとの予約サイト上の口コミを分析した．この口コミ分析によって，宿泊施設の立地や設備・サービスの整備状況だけでなく，経営者の人柄やガイド力，地域の知識量など，経営者の経歴を背後にした運営手法にまで踏み込むことができる.

Ⅴ章では，考察および結論として，中国雲南省元陽における BP 向け宿泊施設の変化について論じた.

2.　アジアにおける BP 観光の展開

(1) BP 観光とアジアでの拡大

本章では，周縁地域の観光地化の展開を，BP の主目的地であるアジア地域を対象に，時系列で整理し，途上国周縁地域の観光地化の中に元陽を位置づける.

1960-70 年代には，ヨーロッパからインドおよびネパールを目指すヒッピー・トレイルと呼ばれるルートが存在していた．1970 年代後半以降，情勢不安からアジア横断型のヒッピー・トレイルの踏破が困難になると，BP の目的地は東南アジアに変遷した.

1970-90 年代の東南アジアにおける BP の目的地およびバックパッカー・トレイルは，バンコクを起点とし，マレー半島のビーチリゾートや，シンガポール, バリなどを経由しながら南下し, オーストラリアを目指すものであった.

2000 年以降は，東南アジアの情勢が変化し，それまで旅行者の訪問が限定的だったインドシナ半島のベトナム，ラオス，カンボジアの 3 ヶ国が，BP の目的地となった．そして，2000 年以降は中国雲南省が東南アジアにおけるバックパッカー・トレイルの延長線上の目的地に組み込まれるようになってきた.

雲南省の辺境地域は 1980 年代から 90 年代にかけて外国人 BP によって発見された．2005 年以降は，観光者数が急増し，BP が発見した周縁地域にも MT が流入するようになる．このように伝統的な BP の目的地に MT が流入すると，観光地化を嫌った BP は目的地をさらに奥地へと求め，結果として周縁地域は拡大していく.

(2) BP による元陽の発見と新街鎮のエンクレーブ化

元陽は長い間，外部に存在が知られていない辺境の農山村地域であった．しかし，1992 年に外国人に開放されると，カメラマンと BP が元陽を訪れるようになった．この時期に，バスターミナルを中軸とした新街鎮中心部（図 2-a）に，BP 向け宿泊施設が集積しはじめ，新街鎮のエンクレーブ化が進展した．しかし，1992 年から 2000 年までは外国人が利用できた宿泊施設は，新街鎮中心部にある人民政府招待所（ゲストハウス）に限られていた.

3.　元陽における BP の属性変化と観光行動

(1) 観光者の属性変化

2000 年以降, MT が元陽の魅力を知り到来した．MT の入り込みは棚田に水が張られて景観が美しくなる農閑期の 2-4 月に集中し，その期間だけ営業する少数民族経営の宿泊施設が勝村や棚田に近接する多依樹元坪道路沿い（図 2-b）に集積した．一方で，新街鎮外縁部にも比較的規模の大きい MT 向けの宿泊施設が集積した.

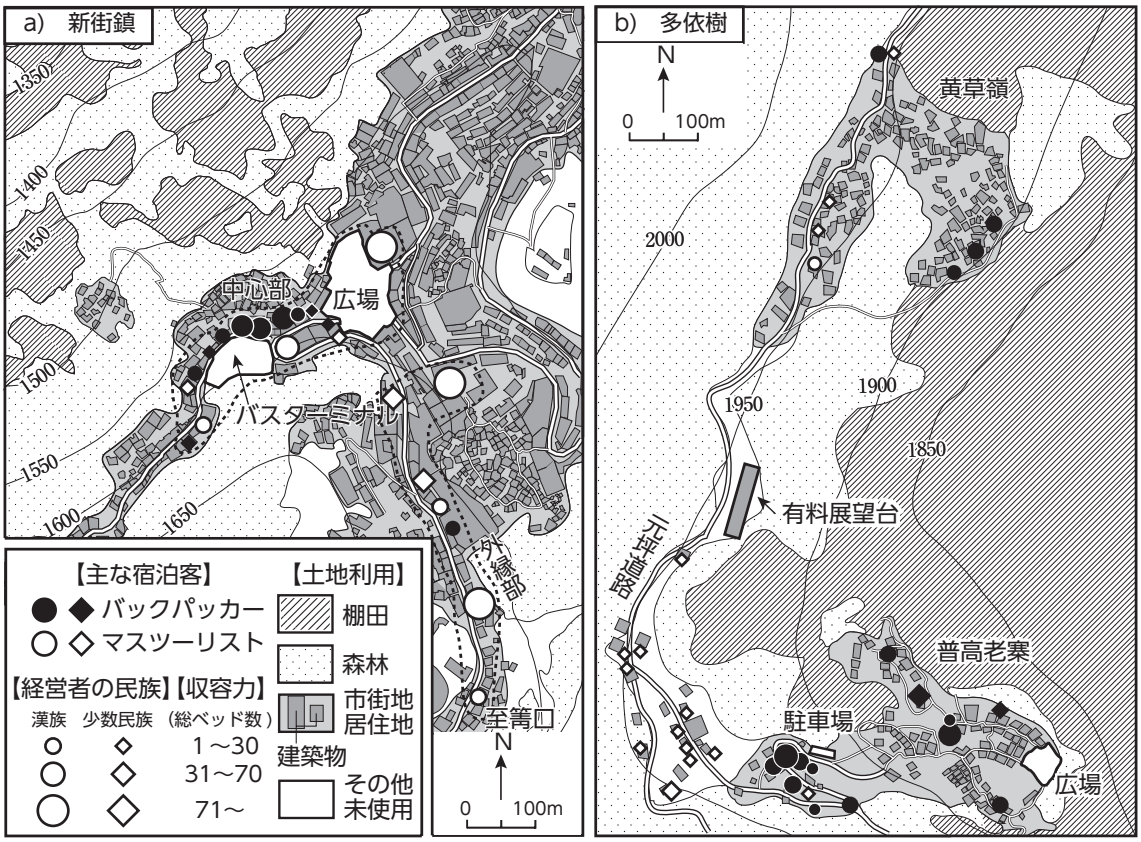

図２　新街鎮・多依樹における土地利用と宿泊施設の分布（2015 年）

注：等高線間隔は 50 m．土地利用は Google Earth 衛星画像判読および歩測により作成．宿泊施設は聞き取り調査により作成．この他，多依樹の有料展望台には旅行会社兼政府経営の宿泊施設が併設されているが，表示していない．

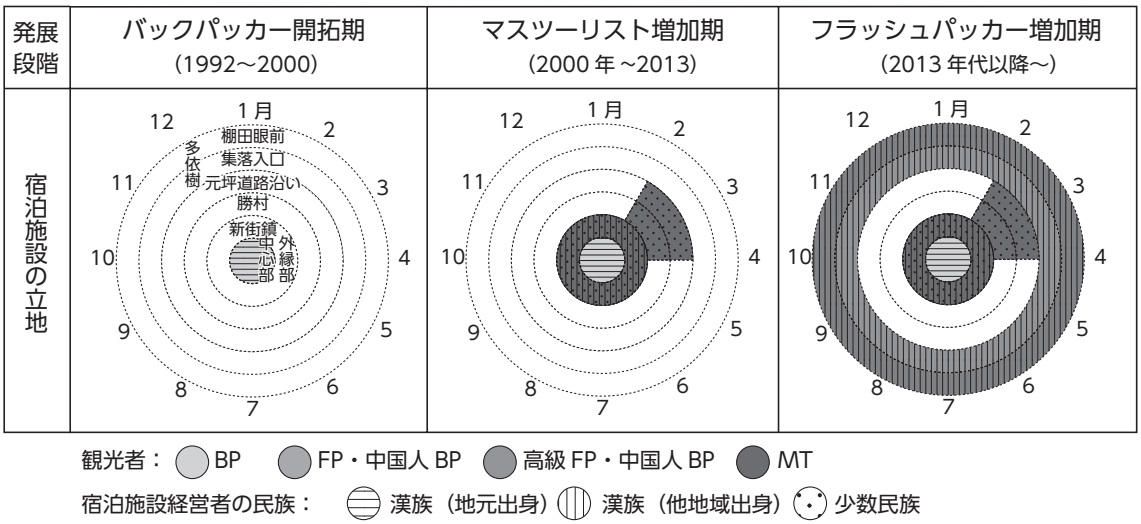

図３　元陽における観光者の変化と宿泊施設の立地変化

一方で，世界的な FP 化の余波を受け元陽にも FP や中国人 BP が訪れ，多依樹に FP 向け宿泊施設が開設された．そのうち，多依樹の普高老寨の集落入り口に安価で BP や FP が主題となったものが，普高老寨・黄草嶺の棚田眼前に高級志向の FP 向け宿泊施設が集積した（図 3）．

(2) BP の観光行動

ここでは，2011 年 8 月と 2015 年 12 月に行った BP からの調査結果に基づき，BP の変化について分析する．調査対象者は，2011 年 8 月に新街鎮中心部の BP 向け宿泊施設を利用していた 12 名と，2015 年 12 月に多依樹の FP 向け宿泊施設を利用していた外国人 FP14 名と中国人 BP9 名の計 37 名である．

旅行日数について注目すると，1 ヶ月以上の長期旅行をしていた BP は，2011 年では 12 名中 9 名を占めていたのに対し，2015 年の外国人 BP は 14 名中 3 名にまで減少している．また，中国人 BP9 名の旅行期間は 1 週間以内が 9 名中 4 名，1 週間から 2 週間以内が 2 名となっており，短期旅行をする者が中心となっている．

次に，旅行のスタイルについてみると，2011 年・2015 年共に，柔軟な行程，情報を集めて予定を変える，ランダムに旅行スタイルを変えるなどの項目を挙げた柔軟なスタイルが継続されているのに対し，2015 年の外国人 BP の方が，より観光地化されていない場所を求める者が増加した．このような旅行期間の短縮化に伴って，より効率的な旅行になるよう観光地化していない地域が求められると考えられる．さらにインターネットやスマートフォンの普及によって観光地の情報が得やすくなり，より観光地化していない場所へのアクセスが容易になった事も併せて考えられる．このようにインターネットやスマートフォンを使って自分たちの好む景観や宿泊施設を容易に探索する FP の性質が，バックパッカー・エンクレーブから棚田を一望に見渡せる地域への宿泊施設の立地移動につながっていると考えられる．

また，宿泊施設の選択方法も変化した．2011 年当時，元陽観光の拠点はバックパッカー・エンクレーブが形成されつつあった新街鎮中心部のバスターミナルであり，外国人 BP はバスターミナル到着後に宿泊施設を探した．彼（女）らの宿泊施設の選択理由は，ガイドブックの情報や立地である．また，ガイドブックを携帯していなかった BP もバスターミナルから近く見つけやすく宿泊料金が安価である新街鎮のバスターミナル周辺の宿泊施設を利用した．

一方で，2015 年に多依樹を訪れた FP や中国人 BP は，元陽到着前に Agoda，Trip Advisor，去哪儿网などのウェブサイトで口コミを見て，そのままオンライン上から予約していた者が増加した．そして，予約サイトでの宿泊施設の選択基準として，価格を挙げる者も増加した．予約サイトでは，価格を基準に宿泊施設を容易に並び替えることができるからである．加えて，新街鎮における BP 向け宿泊施設の価格差に比べ，多依樹では安価な部屋（ドミトリー）から，棚田が眺望できる贅沢な部屋まであるため，選択基準に価格が挙がったと考えられる．また，2011 年の選択理由と同様に，多依樹の宿泊施設の選択理由に立地を挙げた者は 16 名中 5 名いた．新街鎮における BP 向け宿泊施設の立地特性はバスターミナルに近いことであったが，多依樹では棚田観光へのアクセスの良さが評価されていたと考えられる．

さらに，元陽の訪問目的も変化した．2011 年の外国人 BP には，長期間かつ東南アジアと中国を越境して旅行する者が含まれ，元陽は旅行の主目的地ではなく，観光地としての側面と同等かそれ以上に国境越えの拠点性が重視されていた．しかし，2015 年の元陽の訪問目的は，棚田鑑賞，写真撮影が重要視されるようになった．したがって，宿泊施設の立地がより棚田鑑賞・写真撮影に適した多依樹への移動を促したと考えられる．

(3) 元陽での滞在と観光行動

BP・FP 向け宿泊施設は，新街鎮中心部と多依樹の 2 ヶ所に集積している（図 2）．ここでは，BP の観光行動を時期と地域ごとに比較しながら元陽における BP の観光行動の変容について分析する．

2011 年の BP は，自動車やミニバスを利用し，有料展望台を目的地とする者が多かった．一方で，2015 年以降はトレッキングをしながら移動中の棚田景観を楽しむ観光のスタイルに変化した．

このように，BP の観光行動の内容と範囲が変化した要因として以下の点が挙げられる．第一に，

入手した観光情報の差である．2011 年の時点では，スマートフォンが普及しておらずインターネットへのアクセスが制限されていたため，彼らの観光情報はミニバスドライバーと BP 向け旅行会社が持つ情報に従っていた．ところが，2015 年では，元陽の観光情報を事前に入手し，あらかじめ踏破するトレッキングコースを決めていた者も現れた．また，FP 向け宿泊施設の中には，手作りのトレッキングマップを作成したり，観光地化されていないおすすめの村落を紹介したりする新たなサービスの導入や，BP 同士の交流が出来る共有スペースの充実によって旅行情報を交換・共有し異文化交流を楽しみながら中国人 BP と外国人 BP が一緒にトレッキングなどをする姿も珍しくない．このような FP 向け宿泊施設の新たな運営手法の導入が観光情報を充実させ，未知なる地域でのトレッキングと行動範囲の拡大を可能にした．

第二に，宿泊施設の経営者による観光ガイドである．多依樹における大多数の宿泊施設では，それぞれの経営者の趣向を凝らしたガイドサービスが行われている．そして，これらのガイドサービスの内容や充実度は，予約サイトで宿泊施設を予約する際に観覧する口コミである程度把握できる．

第三に，BP 向け宿泊施設の立地変化は，上記の BP の観光行動のトレッキング主体の変化と行動範囲の拡大と対応している．新街鎮の最寄りの棚田は徒歩で 1 時間かかる龍樹壩かミニバスで 30 分かかる箐口で，いずれも気軽に行ける距離ではない．対して多依樹の普高老寨は棚田を眼下に見下ろす位置にあり，棚田へのアクセスは容易である．充実した観光情報を元に，広範なトレッキングを行う FP にとって，バックパッカー・エンクレーブのある新街鎮よりも棚田景観の中に存在する普高老寨の方が好まれると言える．このような観光行動の変化と宿泊施設の立地変化が FP 化と需要を取り込む経営者の新たな運営方策の導入を元に，同時に進行したと考えられる．

4．元陽における宿泊施設の展開と運営方策

(1) 宿泊施設の立地変化

1992 年の対外開放以降，新街鎮中心部に集積した BP 向け宿泊施設の経営者は，元陽県の人口の 5% にしか過ぎない漢族で，1949 年の中国建国以降に移住してきた者や，1988-89 年に新街鎮で発生した土砂崩れによって移住してきた者が中心となっている．彼らは自宅を改造することで宿泊施設の開設に乗り出し，バスターミナル到着後に宿泊施設を探す BP を対象に集客した．この時期に，バスターミナルを中軸とした新街鎮中心部に地元出身の漢族が経営する BP 向け宿泊施設が集積しはじめ，新街鎮に小規模なバックパッカー・エンクレーブが形成された．

2000 年代に入ると，元陽は国内外のメディアの大きな注目を集めるようになり，MT が増加した．その後到来した MT の入り込みは棚田に水が張られて美しくなる農閑期の 2-4 月に集中し，その期間だけ営業する少数民族経営の宿泊施設が勝村や棚田に近接する多依樹の元坪道路沿いに集積した．一方で，新街鎮外縁部にも比較的規模の大きい MT 向けの宿泊施設が集積した．

さらに 2013 年に元陽の棚田が世界遺産に登録されると，元陽の観光地整備が進んだ．一方で，世界的な潮流として 2010 年以降 BP の FP 化が進行し，元陽にも 2013 年から FP が到来し，さらに中国人 BP も増加してきた．その結果，普高老寨に FP 向け宿泊施設が開設された．FP 向けの宿泊施設経営者は，大多数が外部地域出身の漢族で，前職で有名な観光地の大理や麗江において BP 向け産業に従事していた者や，BP 旅行の経験がある者などによって構成される．

(2) 棚田保有状況と宿泊施設の展開

元陽の棚田は政府の規制もあって観光地化した後も荒廃することなく，農業が持続的に営まれている．地元の少数民族が棚田耕作を放棄せず宿泊施設経営に参入できた要因は，MT の季節性が 2-4 月に集中しており，農閑期と一致していたためである．一方で，年間を通じて入り込みのある BP 向け宿泊施設は元陽出身の漢族に，FP 向け宿泊施設は外部出身の漢族によって経営されている．このような，観光者の季節性と経営者の民族の棲み分けによって，地元住民は棚田農業を維持しながら宿泊施設経営に参入することもできた．

(3) FP 向け宿泊施設の設備とサービスの充実

BP は安価で快適水準の低い宿泊施設を好むと

されていたが，近年，BP の FP 化に伴い様々な設備やサービスが要求されることが指摘されている．新街鎮中心部における BP 宿泊施設ではオンライン予約に対応しているものはなく，Wi-Fi や食事の提供，英語対応，観光ガイドの整備も進んでいない一方で，多依樹における大多数の BP 向け宿泊施設では，これらの設備やサービスが提供されている. BP向け宿泊施設で提供される設備・サービスの充実度が，新街鎮と多依樹で大きく異なる理由としては，宿泊施設経営者の BP に対する知識量や，過去の経験などによる．

(4) 多依樹における FP 向け宿泊施設の立地と棚田景観の演出

多依樹における FP 向け宿泊施設は, 開業年次, 集落での立地，宿泊施設の景観演出などによって「棚田眼前先駆型」と「集落入口後発型」「棚田眼前高級志向型」「その他」に分類できる．

棚田眼前先駆型は，棚田眼前という立地特性を生かした景観演出に加え，外観はハニ族の伝統的家屋の景観を忠実に再現しており，内観では経営者自らの民族に基づく民族文化が呈示されていることに特徴がある．

集落入口後発型は棚田景観の眺望には適していないため，ドミトリーを配置した安価な部屋の設置や BP・FP を主題とした内観や備品を充実させていることで利用者を集めている．

棚田眼前高級志向型の宿泊料金は高値に設定されており，巨大窓ガラスやバルコニーなど棚田景観を鑑賞するのに適した設備が施されている．加えて，内観では経営者の趣向に基づく高級感が演出されている．

(5) BP 向け宿泊施設の運営手法の革新

先述したように，元陽を訪れる FP には，予約サイトを利用した者が増加した．元陽の宿泊施設 77 軒のうち，中国語の主要予約サイトである Ctrip と去哪兒網のいずれかに登録しているのは 41 軒，外国資本の主要予約サイトである Trip advisor，Agoda，Booking.com のいずれかに登録しているのは 29 軒である．そのうち，予約サイトに対応している BP 向け宿泊施設は，新街鎮では 2 軒のみだが，多依樹では全ての FP 向け宿泊施設が対応している．また，全ての MT 向けの宿泊施設が予約サイトに対応している．

(6) 宿泊者の口コミ評価

このように，予約サイトに対応した FP 向け宿泊施設が増加した．ここでは，宿泊施設で提供される設備・サービスや経営者の能力を含めた評価について把握する．予約サイトの口コミの分析には，テキストマイニングソフトである KH Coder を利用した．多依樹における FP 向け宿泊施設では 2017 年 8 月までに，主要予約サイトである Trip advisor，Agoda，Booking.com のいずれかの 829 件の口コミがあり，英語によって書かれた 488 件を分析した．次に，中国の主要予約サイトである C trip（携程旅行网）の中国語の口コミ 1,106 件を分析した．口コミは予約サイトごとの評価項目によって点数化されるため，①全ての評価，②高評価，③低評価に分類し，それぞれの抽出語と出現頻度を把握した．次に，抽出語のつながりを分析するため，共起ネットワーク図を作成した．

宿泊施設の口コミによれば，多依樹における FP 向け宿泊施設の評価は，外国人 FP や中国人 BP 共に，経営者，食事のサービス，立地，棚田景観などの要素が挙げられている．経営者の評価に関しては，BP 旅行や BP 観光産業に従事した経歴などを背景とした人柄やホスピタリティーが評価されていた．そして外国人 FP には，英語能力が評価されていた．そのため，経営者の英語力によって外国人 BP と中国人 BP は棲み分けられている．

また，宿泊施設の立地と客室からの景観も重要視されている．特に高級志向の FP は，宿泊施設の客室からの眺望を重要視し，棚田眼前に位置し棚田景観の演出が施された高級志向型の宿泊施設を好んでいた．

5. 結論：BP 向け宿泊施設の変容メカニズム

本研究の目的は，中国雲南省元陽において，BP 向け宿泊経営者の民族や経歴を考察したうえで，新たな運営手法の導入を分析し，さらに宿泊者の宿泊施設選択基準の変化を踏まえて，BP の FP 化に伴う宿泊施設の変化を解明することであった．結果として，以下の結論を得た．

元陽における BP 向け宿泊施設の変化は，BP

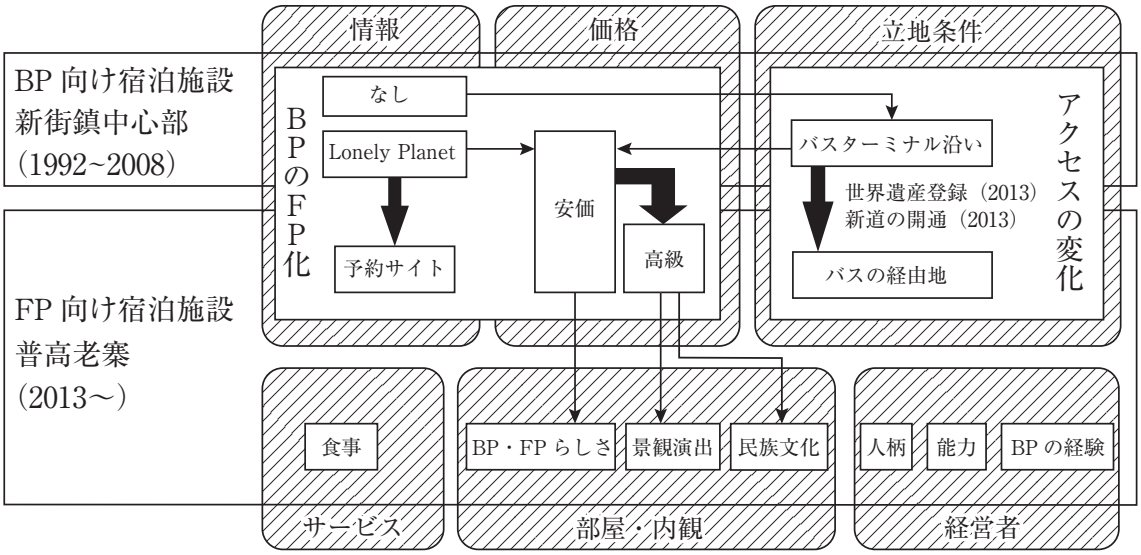

図 4　元陽における BP 向け宿泊施設の変容メカニズム

の FP 化，宿泊施設経営者の能力や経歴，元陽の地理的環境など多数の要因に基づいている（図4）．

1992 年の対外開放以降，新街鎮中心部に小規模なバックパッカー・エンクレーブが形成された要因は，バスターミナルとの近接性である．新街鎮中心部の BP 向け宿泊施設経営者は元陽県の人口の 5% にしか過ぎない漢族で，1949 年の中国建国以降に移住してきた者や，1988-89 年に新街鎮で発生した土砂崩れによって移住してきた者が中心となっている．彼らは自宅を改造することで宿泊施設の開設に乗り出し，バスターミナル到着後に宿泊施設を探す BP を対象に集客した．

その後，多依樹に FP 向けの宿泊施設が集積するようになった．その要因は次のようにまとめられる．

第一に，2013 年の世界遺産登録に伴う交通アクセスの向上が挙げられる．昆明または河口と元陽を結ぶ長距離バスは新街鎮中心部に位置するバスターミナルを拠点としていたが，世界遺産登録に合わせて新道が開通し多依樹にまで延伸した．

第二に，BP の FP 化である．先行研究で指摘された FP および中国人 BP の主な特徴は，BP と同様に柔軟で観光地化されていない場所を求め，旅行期間が従来の外国人 BP よりも短く，宿泊施設は安価なものから高級志向まで様々なものを利用し，電子機器を活用しインターネットを好むことである．元陽を訪れる FP も同様の傾向を示しており，このような性質を持つ FP が，多依樹に FP 向け宿泊施設の開設を後押しした．

このようなインターネットやスマートフォンの普及は，宿泊施設の選択方法を変化させた．2011 年の現地調査当時，BP は元陽に到着してから宿泊施設を探すため，*Lonely Planet* の情報に従ってバスターミナル周辺の宿泊施設を選択するか，*Lonely Planet* を携帯していない BP はバスターミナルから近くて見つけやすい BP 向け宿泊施設を利用していた．一方で，2015 年の調査時には，FP や中国人 BP は元陽到着以前に予約サイトから宿泊施設を予約した者が増加した．そのため，予約サイトに掲載されている宿泊施設の情報や口コミを観閲して，自分の好みや予算に合わせた宿泊施設を選択するようになった．

宿泊施設の口コミによれば，多依樹における宿泊施設の評価は外国人 FP や中国人 BP 共に，経営者，食事のサービス，立地，棚田景観などの要素が挙げられている．経営者に関しては，BP 旅行や BP 観光産業に従事した経歴などを背景とした人柄やホスピタリティーが評価されていた．そして外国人 FP には，英語能力が評価されていた．このため，経営者の英語力によって外国人 BP と

中国人 BP は棲み分けられている．また，宿泊施設の立地と客室からの景観も重要視されている．特に高級志向の FP は，宿泊施設の客室からの眺望を重要視し，棚田眼前に位置し棚田景観の演出が施された高級志向型の宿泊施設を好んでいた．

さらに，宿泊施設の立地が新街鎮から多依樹に移動したことに伴って，BP の観光行動の内容と範囲が変化した．棚田までのアクセスが悪い新街鎮の BP 向け宿泊施設を利用していた BP は，ツアー，またはミニバスを利用し，有料展望台まで往復していた．一方で，多依樹の FP の主要なルートは多依樹から勝村を経由して，徒歩片道 3 時間のところにある箐口村までであった．加えて，ガイドブックやパンフレットには掲載されていない少数民族の集落にまで BP 観光行動の範囲が広がった．このように，ツアーやミニバスを使った 2011 年に比べて，2015 年以降はトレッキングをしながら移動中の棚田景観を楽しむ観光のスタイルに変化した．このような観光スタイルを変化させたのは，宿泊施設の立地変化に加えて，FP 向け宿泊施設の経営者による観光情報提供と観光ガイドである．このような観光行動の変化と宿泊施設の立地変化が，BP の FP 化と需要を取り込む経営者の新たな運営方策の導入を元に，同時に進行した．

1990 年以降，BP は観光研究における重要な研究課題の 1 つとして取り上げられるようになってきた．Oppermann（1993）の発展途上国における観光空間の発展モデルでは，観光地発展の初期段階において，BP の到来に伴い地元住民による低廉な観光施設が誕生すると論じられている．そして，途上国における観光地では，アメニティ水準の低い BP 向け宿泊施設が地元住民に観光産業への参入契機を与え，直接的な利益が波及するとされた事例が報告されている（Hampton, 1998；Hampton, 2003；Visser, 2003）．しかしながら，BP 向けの観光産業でも MT 向けの観光産業と同様に，外部出身者が優勢になる事例も報告されている（横山，2007；Brenner and Fricke, 2007）．1992 年に対外開放された元陽では，観光地化の初期段階に地元出身の漢族による BP 向け宿泊施設の経営が卓越していたが，2013 年以降，FP の増加に伴って外部出身の漢族による宿泊施設の経営が卓越するように傾向が変化した．したがって，BP 目的地としての元陽は BP の FP 化を契機に，前者の事例から後者の事例に移行しつつあるといえよう．

Loker and Pearce（1995）の定義によれば，BP は安宿を利用し，比較的に旅行期間が長い旅行者である一方，FP は様々な宿泊施設を利用し，比較的に旅行期間が短く，電子機器を利用する旅行者とされてきた（Butler and Hannam, 2014；O'regan, 2008；Paris, 2012；Molz and Paris, 2015）．そのような FP の出現によって，従来の低廉な BP 向け宿泊施設とは異なり，オンライン予約可能なサービスや従業員の応対能力が求められる質の高い BP 向け宿泊施設が誕生した（Musa and Thirumoorthi, 2011；Hiransomboon, 2012）．さらにバンコクでは，FP の出現に伴い，BP 向け宿泊施設の集積傾向はバックパッカー・エンクレーブが形成されているカオサン通りではなく，観光地や交通アクセスが良いエリアへと拡大した（Hiransomboon, 2012）．元陽でも同様に，外部出身の漢族経営者はすでにバックパッカー・エンクレーブが形成されていた新街鎮を選ばず，客室からの棚田景観の眺望が可能な多依樹で FP 向け宿泊施設の集積地区を作り上げた．このように，元陽における BP 向け宿泊施設は BP 向けと FP 向けが両立し，経営者の属性および経営内容において地域的差異が生じた．

かつて元陽を発見し観光地化の端緒となった BP だが，急速な観光地化が進行する現在では，大挙して押し寄せる観光者の一部に過ぎない．しかし，FP へと変化した彼らは，滞在の際には設備やサービスが充実した宿泊施設を求めるようになり，目的地には観光地化していない場所を好んだ．元陽においても FP の需要に応えるように，設備やサービスの工夫による棚田景観の眺望演出や趣向を凝らした内観が施されている FP 向け宿泊施設が増えてきた．加えて，FP 向け宿泊施設の新たな運営方策によって，まだ観光地化していない棚田や少数民族の集落へのトレッキングが増加した．

元陽における BP 向け宿泊施設は，MT 向け宿泊施設と棲み分けながら独自の発展を遂げてきた．加えて，2013 年以降の BP の FP 化に伴い

BP 向け宿泊施設も変化してきた．本研究ではその変容メカニズムを，立地変化，経営者の経歴，棚田景観を中心とした内観の演出，口コミ分析を通じた宿泊施設利用者の評価から分析することで解明した．また，実際に旅行者への聞き取り調査を行うことで，BP の FP 化や宿泊施設の変化に伴う観光行動の変化についても明らかにした．加えて，BP と MT が観光の季節性と経営者の民族性において棲み分けられることによって，地元の少数民族が棚田農業を継続しながらも宿泊施設経営に参入できる１つの要因となっていることも明らかになった．

途上国周縁地域は BP に観光の目的地として発見された．そして，その後の BP の FP 化に伴い，他地域出身の元 BP や BP 向け観光産業の従事者によって FP 向け宿泊施設経営の目的地として発見された．このように，BP の FP 化および BP 向け宿泊施設の変化は，元陽のような一見すると MT が優勢の観光地においても起きている．したがって，途上国周縁地域における観光地を研究する際には，観光地の発展段階にかかわらずその観光地を発見した BP は無視できない存在である．加えて，BP の変化や FP の実態についても分析する必要がある．■

【参考文献】

Adachi, M. (2007) Agricultural Technologies of Terraced Rice Cultivation in the Ailao Mountains, Yunnan, China. *Asian and African Area Studies,* 6(2) : 173-196.

Brenner, L. and J. Fricke. (2007) The Evolution of Backpacker Destination : the Case of Zipolite, Mexico, *International Journal of Tourism Research,* 9 : 217-230.

Butler, G. and K. Hannam. (2014) Flashpacking and Automobility, *Current Issues in Tourism,* 17(8) : 739-752.

杜国慶（2012）：中国雲南省における少数民族の分布について．立教大学観光学部紀要，14，74-82.

Hampton, M. (1998) Backpacker Tourism and Economic Development, *Annals of Tourism Research,* 25 : 639-660.

――――― (2003) Entry Points for Local Tourism in Developing Countries : Evidence from Yogyakarta, Indonesia, *Geografiska Annaler,* 85(B) : 85-101.

Hampton, P. M. and A. Hamzah. (2010) The Changing Geographies of Backpacker Tourism in South-East Asia, *Working Paper Series,* Canterbury : Kent Business School.

Hannam, K. and A. Diekmann. (2010) From Backpacking to Flashpacking : Developments in Backpacker Tourism Research, Hannam, K. and Diekmann, A. eds., *Beyond Backpacker Tourism : Mobilities and Experiences,* Bristol : Channel View Publications, 1-7.

Hiransomboon, K. (2012) Marketing Mix Affecting Accommodation Service Buying Decisions of Backpacker Tourist Traveling at Inner Rattanakosin Island in Bangkok, Thailand, *Procedia Economics and Finance,* 12(3) : 276-283.

Jarvis, J. and V. Peel. (2010) Flashpacking in Fiji : Reframing the'Global Nomad'in a Developing Destination, Hannam, K. and Diekmann, A. eds., *Beyond Backpacker Tourism : Mobilities and Experiences,* Bristol : Channel View Publications, 21-39.

角媛梅（2009）：哈尼梯田自然与文化景現生態研究，中国環境科学出版社，223p.（中国語）

菊池真純（2016）：農村景観の資源化―中国村落共同体の動態的棚田保全戦略．御茶の水書房，359p.

劉丹萍・保継剛（2006）：旅游者“符号性消費”行為之思考―由“雅虎中国”的一項調査説起．旅游科学, 20 (1), 28-33.（中国語）

Loker-Murphy, L. and P. Pearce. (1995) Young Budget Travelers : Backpackers in Australia, *Annals of Tourism Research,* 28 : 50-67.

Luo, X., S. Huang. and G. Brown. (2015) Backpacking in China : A Netnographic Analysis of Donkey Friends' Travel Behaviour, *Journal of China Tourism Research,* 11(1) : 67-84.

松村嘉久（2001）：中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略．東アジア研究，32，25-46.

Molz, J. and C. Paris. (2015) The Social Affordances of Flashpacking : Exploring the Mobility Nexus of Travel and Communication, *Mobilities,* 10(2) : 173-192.

Musa, G. and T. Thirumoorthi. (2011) Red Palm : Exploring Service Quality and Servicescape of the Best Backpacker Hostel in Asia, *Current Issues in Tourism,* 14(2) : 103-120.

Oppermann, M. (1993) Tourism Space in Developing Countries, *Annals of Tourism Research,* 20 : 535-556.

Oppermann, M. and K. S. Chon. (1997) *Tourism in Developing Countries.* London : International Thompson Business Press, 173p.（＝内藤嘉昭訳（1999）途上国観光論．学文社，238p.）

O'Regan, M. (2008). Hypermobility in Backpacker Lifestyles : The Emergence of the Internet Cafe, Burns, P. and Novelli, M. eds., *Tourism and Mobilities : Local Global Connections,* Walingford : CABI, 109-132.

Paris, C. (2012) FLASHPACKERS : An Emerging Sub-Culture?, *Annals of Tourism Research,* 39(2) : 1094-1115.

Sørensen, A. (2003) Backpacker Ethnography, *Annals of Tourism Research,* 30(4) : 847-867.

Scheyvens, R. (2002) Backpacker Tourism and Third World Development, *Annals of Tourism Research*, 29 (1) : 144-164.

須藤廣（2008）：観光化する社会―観光社会学の理論と応用．ナカニシヤ出版，192p.

Sun, J. (2010) Tourist Tales : A Case Study on Photography Tourism in Yuanyang, China, *Senri Ethnological Studies,* 76 : 111-130.

Visser, G. (2003). The Local Development Impacts of Backpacker Tourism : Evidence from the South African Experience, *Urban Forum,* 14(2-3) : 264-293.

横山智（2007）：途上国農村におけるバックパッカー・エンクレーブの形成―ラオス・ヴァンヴィエン地区を事例として．地理学評論，80(11)，591-613.

Changes in Backpacker's Guesthouse in Yuanyang, Yunnan, China

ITAGAKI Takeru

Backpackers have discovered tourist attractions in the surrounding areas of developing countries. However, at present, an influx of mass tourists in these areas has been observed in addition to backpackers turning into flashpackers. The aim of this study is to (i) analyze the introduction of a new management method upon consideration of the people and careers involved in hospitality management for backpackers and (ii) clarify the changes in accommodation facilities, which have accompanied the backpackers turning into flashpackers, based on recent changes in guests' criteria for selecting accommodation in Yuanyang located in Yunnan, China.

Backpackers discovered Yuanyang and ethnic minority tourism in Yunnan when it was opened to the public in 1992. Backpacker accommodation facilities managed by local Han Chinese concentrated in central Xinjiezhen and a small scale backpacker enclave developed in Xinjiezhen. Mass tourists have visited since the year 2000 and accommodation facilities managed by ethnic minorities, which are open only during the agricultural off-season from February to April, concentrated Shengcun and along Yuanping Road in Duoyishu near rice terraced fields. On the other hand, flashpackers and Chinese backpackers had been visiting Yuanyang since 2013. Accommodation facilities for high-end flashpackers concentrated in front of rice terrace fields in Pugaolaozhai and huangcaoling despite inexpensive accommodation at the entrance to the village of Pugaolaozhai in Duoyishu being popular among backpackers and flashpackers.

Accommodation facilities for flashpackers concentrated in Duoyishu for two reasons. Firstly, new roads opened with taking advantages of the registration as World Heritage. From then on, the buses from Kunming and Hekou to Yuanyang directly run to Duoyishu before the bus terminal in Xinjiezhen.Second, backpackers turning into flashpackers. The main characteristics of flashpackers and Chinese backpackers who visit Yuanyan are the desire for destinations that have not become tourism destinations, staying periods shorter than those of foreign backpackers to date, accommodation at various types of facilities ranging from inexpensive to high-end, and access to the Internet via electronic devices. Flashpackers with such characteristics instigated the establishment of accommodation facilities for flashpackers in Duoyishu.

When evaluating the accommodation facilities in Duoyishu, both foreign flashpackers and Chinese backpackers mention factors such as management, food service, location, and the landscape of rice terraced fields. Management was evaluated according to personality and hospitality, and experience in backpacker tourism and the backpacker tourism industry. Foreign flashpackers evaluated management according to their English language skills. As a result, foreign flashpackers and Chinese backpackers are separated according to the English language skills of the management. In addition, the location of the accommodation facility and the view from the guest rooms are considered important. High-end flashpackers value the view from the guest rooms in particular, and appreciated high-end accommodation facilities located in front of rice terraced field and the respective view. The abovementioned changes in tourist behavior and location of accommodation facilities have advanced simultaneously as a result of backpackers turning into flashpackers and the introduction of a new management system by managers who incorporate demand.

Keywords: backpacker, flashpacker, guesthouse, rice terraced field, Yuanyang